

May 2008

浄土

monthly
JŌDO

法然上人讃仰会



念佛はこれ勝れ、余行はこれ劣れり。
ゆえんはいかんとなれば、
名号はこれ万徳の帰する
所なればなり。

(選集第三)

鬼海弘雄『浄土』2008年年間表紙写真の人

きかいひろお 1945年山形県寒河江市生まれ

法政大学文学部哲学科卒業。山形県職員を辞して、トラック運転手、造船所工員、遠洋マグロ漁船乗組員など様々な職業を経て写真家に。1973年より浅草寺で人物写真を撮りはじめる。

APA賞特選、日本写真協会新人賞、伊奈信男賞、「写真の会」賞受賞。

写真集「PERSONA」で第23回土門拳賞受賞。

写真集

『王たちの肖像：浅草寺境内』矢立出版1987年、『India』みすず書房1992年、『や・ち
また：王たちの回廊』みすず書房1996年、『東京迷路』小学館1999年、『印度や月山』
白水社1999年、『しあわせ：インド大地の子どもたち』福音館2001年、『Persona』草
思社2003年、『べるそな』草思社2005年、『In-between8 鬼海弘雄 ボルトガル、マル
タ』EU・ジャパンフェスト日本委員会2005年、『東京夢譚』草思社2007年、『集合住
宅物語』みすず書房2004年(撮影・鬼海弘雄 文：植田実)、『メッセージ』樹立社
2006年(撮影・鬼海弘雄 文：都はるみ)

浄土

2008/5月号 目次

仏教と話芸	杉山二郎	2
宣誓	大室了皓	9
話は目で聞く	高木悦男	10
会いたい人 坂東三津五郎さん①	関 容子	14
響流十方	袖山榮輝	22
江戸を歩く 第十六回	森 清鑑	26
法然上人とその時代 壇の浦へ 第七回	石丸晶子	34
Jフォーラム		43
誌上句会	選者＝増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはねっ	かまちよしろう	47
編集後記		48



表紙題字＝中村康隆前浄土門主
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

仙教と 話芸

杉山二郎

インドで釈迦牟尼（ゴータマ・シッタールダ）の教説が行われたのは、紀元前六世紀から五世紀のころといわれている。当時のインド社会はヒンドゥー教が支配していて、バラモン（神官）、クシャトリア（武人）、バイシュヤ（庶民）、シュードラ（奴隷）からなる身分制度からなっていた。いわゆる四姓制度がそれである。職業身分も結婚も身分によって定められており、決して自由選択はできなかった。こうした制度の在り方に批判の眼を向けて自由と平等と慈悲を説いたのが釈迦牟尼だった。彼の八十歳の生涯はガンジス河流域の都市町村を遊行遍歴しながら当時の人たちに平易卑俗な言葉で彼の理想とする人間としての生き方を説いて歩いた。おそらく彼の説教は聞く者に耳を傾けさせる魅力のある、興味をかきたてる話し方だったろうと思われる。実践倫理の徳目を中心にした哲学思想が眼目であつたろうけれども、老若男女を問わず彼の話芸に聞き惚れる技術なしには、布教が成功したとは思われない。弁舌の達者、比喩寓話を自在に駆使する非凡な才能があつたればこそ、多くの信者たちを集め得たに違いあるまい。今日膨大な仏教経典が残っているが、その漢訳経典の冒頭に「如是我聞（かくの如く我聞けり）」とあるのを見ても、釈迦牟尼が弟子たちに向かつての教説が言葉を話すことで説教したことの片鱗がうかがわれよう。面白いことに当時のユーラシア大陸の東西に活躍した、ギリシアのソクラテスも、中国の孔子もいずれも口頭による説教であつた。弟子たちがその師の話芸に魅了されて、文字化したのが、孔子の「論語」であり、プラトンの「ソクラテスの弁明」だった。

口から口への伝承はだんだん人から人へと伝えられてゆくにつれて変化するものだから、弟子たちの間に師の言葉を文字化する結集作業けつしふぎが起ころのは当然である。仏教についていえば、漢訳『大正新修大藏經』八十八巻の膨大な記録も、渡辺照宏氏の『お経の話』

(一九六七年六月、岩波書店刊岩波新書)によると「大藏經」をそこはかとなく読み漁っている、絶えず思いがけないことを発見する。天文・地理・植物・動物・生理・衛生・医学・薬学・論理・心理・政治・経済・社会・家庭・職業・風俗・習慣など面白い話題がいくらかでもある。寓話・笑話・説話・物語も無数にある。いくら読んでも読みあきることがない。」とあり、情死のことが『中阿含經』卷第六十のなかに見出された由を記しておられる。(前著まえがき)言葉を変えていえば、大藏經は、東アジア圏の文化學術、説話の一大百科事典からなっているといっても過言ではない。確か南方熊楠翁もボルノマがいの説話が律部經典のなかにあることを指摘されていて、わたくしも参照して見ると「なるほど」と我点がいった記憶もある。

もちろん、漢訳經典は漢字の羅列であるから嗜読も容易でないけれども、これらが僧侶や善知識の口から説かれたりすれば、そして平易に解釈注釈を加えてもらえば、一般大衆の耳目に達して興味をひいたであろうことは、充分に想像できるであろう。

インドの地においても釈迦牟尼の亡くなった後、弟子たちによる説教の内容が文字化された仏典結集が、入滅して間もなくと、二百年後のアシヨカ王の時代、さらに紀元二世紀中頃のカニシカ王の時代には大規模な結集が行われたことが知られている。釈迦牟尼の生涯を辿った仏伝や、彼の前世の姿を追感して編纂した本生譚(ジャータカ)、比喩寓話の類が次々と作られた。これらの説話はそれまでインドの社会に流布していた口碑伝説、民間説話の類が利用雑採されて、人々の興味を唆つたに違いない。今日釈迦牟尼の遺骨を安置したストゥーパ(仏塔)の門櫓や玉垣に石造浮き彫りされた仏伝や本生譚の造形表現が、サーンチー、ボドガヤー、パールフトの遺構として残っているが、一種の絵巻物の源

流を思わせる。というのも、わたくしがかつてサーンチーの遺跡を訪問した折のこと、黄衣の僧侶が群衆に竹竿で仏伝の光景を指しながら絵解きを節付けて説明しているのを目撃した。こうした光景はこれらの説教僧らによって、古代から仏教信者たちの巡礼に向かつてなされてきたに違いない。後で聞けばチベットからの仏教徒たちの巡拝の由であったが、朗々たる釈迦の生涯の一部を説教する話芸にはからずも接した好機会となった。

こうした遺跡の説教話芸は、今日文化遺産の一つとなったアジャンター石窟寺院の壁画に観光客目当のガイド説明があるが、仏教説話の話芸といった趣きは感じられないのは残念である。仏伝や本生譚の造形表現は北西インドのガンダーラ地方や、中インドのマトゥラー博物館に数多く残っていて、僧院、塔婆の壁面を飾った遺品を目睹することができ、仏教徒の殆どいない今日、釈迦一代記や前世物語が節付けて説教されている様子はまったくない。けれどこれらの遺構が建立されて仏教徒たちが参詣居住していた頃には、必ずや絵解き解説の話芸をもった人たちが活躍したに違いあるまい。こうした推測を実証してくれるのが、中国の敦煌石窟遺跡であろう。北凉から西夏の時代にかけて開鑿された沙漠のオアシス都市郊外にある鳴沙山敦煌千仏洞は、数多くの仏教壁画と塑像仏像が保存せられているばかりでなく、たまたま調査に訪れたイギリスのスタイン、フランスのペリオらによって搬出された敦煌秘室に蔵儲されてあった書冊経卷、織幡画類のなかに注目すべき作品が含まれていた。世にいう「変と変文」がそれである。変とは変相図のことで、阿弥陀仏、薬師仏、弥勒仏、釈迦仏の浄土変相図や、経典内容を図化して絵画表現したものを指す。芥川龍之介の小説「地獄変」も平安時代に作られた地獄変相図にまつわる話である。これらの変相図の絵解き文章が変文であって、演者たる説教師の語る文章の種本とい

えよう。これらの資料から推測されることは、この敦煌千仏洞への参詣者たちに対して、遺構に居住していた僧侶のなかに変相図の絵解き役である話芸に秀でた専門家がいたろうことを想定させよう。縁日法式の際に彼らが立役者として活動したろうことは当然である。単に変文を読み上げるだけではなくて、演者の話芸が聴衆の耳目を集めるのに果たした役割も無論あったに違いない。こうした話芸は寺院の境内だけでなく、宮庭や貴族の邸宅で行われた法会、例えば法華八講といった『妙法蓮華經』八卷の講説解釈の法会に際して、説教者が聴衆に演じたことがあったと思われる。中国ではこれら説教唱導の巧みな僧らの伝記があつて、梁の慧皎撰『高僧伝』卷十三に唱導十人が列挙されているし、唐の道宣撰『続高僧伝』卷三十雜科聲德篇に十二人が記されている。吾が国の説教師を史上に留めている僧が虎関師鍊の『元亨釈書』卷第二十に、志三、音芸志のなかに唱導師の條がある。それを略記すると治承養和の頃（一一七七一—一一八一）澄憲法師という僧がおり、性格は舌を出すすと泉の湧くが如く、一たび高座に昇ると四衆耳を清すしたが、晩年戒法を慎まずにしばしば数人の子を生んだ由を伝えている。澄憲の子が聖覚数代に涉つて唱導師となつており、隆承、憲実、憲基に伝わり氏族が繁栄したと述べている。彼ら唱導師はその音声に魅力があつて、弁舌が巧みで理解し易く、比喩方便を駆使して興味をひき、博覧強記でいずれの方面にも渉る知識の持ち主だったらしい。また清少納言の『枕草子』に述べられているように美男子であることも条件の一つであつたようだ。平安時代の貴族生活を活写した紫式部の『源氏物語』を見ると、ちょうど藤原道長、頼道の頃十世紀から十一世紀の世の中で、比叡山延暦寺の天台宗、法華信仰と阿弥陀極樂浄土への帰依からする浄土信仰全盛期である。法成寺や宇治平等院鳳凰堂の造営とそこで行われた迎講式の様子は、「栄花

物語」、「御堂関白記」の記述から知られるが、彼ら唱導師らの姿は散見されるに過ぎない。むしろ法華八講や摩訶止観での説教師の姿が顕在している。

鎌倉時代に天台宗から派生したいわゆる鎌倉新仏教は法然の浄土宗、親鸞の真宗、日蓮の日蓮宗、道元の曹洞宗、栄西の臨済宗として庶民、武士、農民の間に流布するにいたった。南北朝時代から日本も近世的な社会が醸成されてきて、それまでの御霊や物の化の類からなる鬼神も、桃太郎や一寸法師に退治征服され、野の聖、山の聖が漸時京洛の地に活発な活動を行い、特に応仁の乱を契機として町衆が勃興成立するにつれて、大衆勧進や庶民信仰がにわかに目立ってくる。戦国の動乱も信長、秀吉を経て家康の元和偃武、徳川二百五十年の泰平を迎えるにいたり、京阪と江戸の都市交代が漸時栄えた。こうしたなかで大衆芸能として歌舞伎、音曲、講談、落語などが劇場、枳場、寄席に人々を吸収した。これら大衆芸能の発達の淵源に『平家物語』の琵琶による平曲や、『太平記』読みの講談が基調となって庶民の興味をひくようになった。もちろん、すでに各宗派の説教師が農村から都市へと遊行聖として巡回布教を行っていて、節談説教のように經典、仏教説話、仏伝、上人一代記の類が面白く節付けされて大衆の耳目を聳立てていた。会式、縁日、市場の隅でこれらの話芸の花が咲いていたことは勿論であった。落語の祖といわれる安楽庵策伝も、こうした唱導師の一人として登場する。後に専門の噺家が寄席に登場して落し噺、いわゆる噺の下げに落をつける頓智が加わり大衆の人気を博するにいたるが、噺の筋の多くが寺社の縁起、宗派ごとの題材が豊富に用いられた。関山和夫氏の分類だけでも、真言宗の「大師の杵」、「大師巡り」、「悟り坊主」、浄土宗の「十八檀林」、「万金丹」、「小言念佛」、「阿弥陀池」、日蓮宗の「法華長屋」、「甲府い」、「鯨沢」、真宗の「お座参り」、「お

文様”、“宗論”、禪宗の”野ざらし”、“こんにやく問答”、“野崎参り”、和宗の”天王寺詣り”、“葉刀息子”その他善光寺に因んだ”お血脈”、“鶴満寺”、“金閣寺きらいいきらい坊主”、“転失気”、“寿限無”等々数多くが挙げられている。仏教経典が文化百般の一大百科事典であるのは、渡辺照宏氏をまつまでもなく落語を聴いてもわかるであろう。

杉山二郎(すぎやまじろう)

〈略歴〉

1928年 東京に生まれる

東京大学文学部美学美術史学科卒業

奈良国立文化財研究所を経て、東京国立博物館東洋考古室長

停年後は国際仏教学大学大学院教授(～2004年3月まで)

1965～66年 東京大学イラク・イラン遺跡調査団に参加

1976～78年 東京大学イラン・イラク学術調査団に参加

〈著書(抄)〉

「正倉院 流砂と潮の香の秘密をさぐる」

1980年、筑摩書房

「オリエント考古美術誌 中東文化と日本」1981年、NHKブックス

「毒の文化史」1990年(共著)、学生社

「真珠の文化史」1990年、学生社

「日本彫刻史研究法」1991年、東京美術

「天平のペルシア人」1994年、青土社

「仏教文化の回廊」1998年、青土社

他多数

良心に従って、真実を述べなにごとも隠さず、偽りを述べないことを誓います。

これは裁判などで、証言する前に行う宣誓の言葉である。

私はちかく証言台に立つかも知れないので、弁護士さんにあらためて宣誓の言葉を伺ったが、さて、と考えてしまった。「良心に従って」という言葉に納得できないからである。

法然上人のお言葉に、「一人一日中、八億四千念、念々の中の所作、みなこれ三途の業といえり」と。

このお言葉から考えても、十悪五逆の凡夫である私には、真実にしてなにもものにも動じない尊厳にして犯すべからざる

ような、世でいうところの良心たるものが心底にあるという自信は全く無い。

「その良心に誓う」などナンセンスだ。

そこで、証言する前に裁判官に尋ねようと思っている。

「私には確たる良心などありません。その良心に誓うなどとは私には無意味だと思います。」

私は仏教徒です。仏を信じています。その教えを奉じて八十年の人生を生きてきました。ですから、宣誓の言葉の冒頭の、良心に従って、と言う所を、仏の教えに従って、と言い換えてはいけなishようか」と。

裁判官はどの様に答えてくれるだろうか。証言台に立つのを今から楽しみにしている。

教育回想

高木悦男

遺稿

2



話は目で聞く

「話は目で聞け」。私は話をする人の目をじつと見て、話を聞きなさいと永いこと言い続けてきた。この私の教えを一番に実践してくれたのが、乙武洋匡君だった。

私はこの指導の重点の場として、毎週月曜日に行われる全校児童朝礼に於ける学校長の話を取りあげた。学校長はしばしば「私の話を本当によく聞いてくれるのは乙武洋匡君です」と褒めてくれた。私も時々教室に戻ってから、「今日の校長先生の話はどのような話だった？」と、聞いたことがある。その時いつも乙武君が、校長先生の言わんとするところを的確に答えてくれた。

私がなぜ学校長の朝礼での話を、話を聞く指導の場として取りあげたのかというと、大勢の中で話を聞くことは、気が散りやすくなかなか難しいからである。特に全校児童の集まる朝礼では、友達どうしつきあったり、小声で話したりしている子が多く、このような場でしっかり話を聞くことが出来る子は、どこでも話が聞ける子に育つと考えたからである。

そしてもう一つ、学校長が児童を直接指導する場は、月曜日の朝礼だけと言ってもいいであろう。そのために学校長は、児童朝礼に於ける話に全精力を打ち込むのである。

A校長は、草花や虫などの成長過程について話をし、子どもたちに生命の尊重を語りかけ、B校長は、交通法規をわかりやすく話をし、自分の身体は自分で守ることを力説された。C校長は、教育目標をわかりやすく解説して教育目標の具現化に努められていた。ここで、C校長について少し話をしよう。

私は通勤途中よくC校長と出会って話をしながら学校に向かった。しかし、月曜日は出会っても気づかない振りをして会うことを避けていた。それは、月曜日にはC校長は必ず紙切れに目を通し、ぶつぶつ言いながら時計を見て歩いていたからである。十分間の朝礼で話す練習をしているのである。また彼から、月曜日の朝礼が終わると火曜水曜で構想を練り、木曜金曜で原稿にして月曜日に備えるのだということも聞いたことがある。

校長先生が子どものためにそこまで努力なさっていることを知った私は、子どもを担任している者として、学校長の話をしっかり聞かせる責任を感じたのである。それと同時にしっかりと聞かせなかったら、子どもたちにとって大きな損失であると考えたのである。

話を聞く子を育てることは教師のつとめであり、全校を上げて取り組むべき問題である。私は教育は聞くことから始まると考えている。教師の話を聞き、話し合いは友達の話に耳を傾けることから始まる。高校、大学に行っても、先生の話を聞いてノートに書きとめ、考えるであろう。中にはノートをとらないでよく話を聞いていなさいと言う先生もいる。

今まで私は「きく」を「聞く」という字だけで書いてきたが、「きく」にはもう一つ、「聴く」という字がある。ここで「聞く」と「聴く」について考えてみよう。

「聞く」は、聞こえて来るといふニュアンスが強く、校長先生が何かを話している程度の聞き方をしている生徒に使う。それに対して「聴く」は、心を込めて聴く、自分から進んで聴くことで、話の内容をある程度理解して聴いている生徒に使われる。

余談だが、ちょっと前まで防衛庁のことを防衛廳としていた。国民の声にもっと耳を傾けて行政に活かさないという意味があったのではないだろうか。現在の「庁」の字になつてから、国民の声を忘れていないかと思ってしまうのは私だけだろうか。

「話は目で聞け」。話をする人の目をしっかり見て、その話を心で聴くということに、心がけてゆくことが、私の教育の原点であり、同時に教育の目標でもあると確信しているのである。

(おわり)



高木悦男先生は、乙武洋匡氏を小学校一年生から四年生までの担任をされ、障害児の普通学校での教育に、多大なる実績を残された先生である。

昨年乙武氏が小学校の教諭になられたことを心から喜ばれ、ご自身の教育理念の一端をこの際まとめてみたいとの一念から、今回の連載のお申し出があった。その四日後、本年元旦に突然お浄土に旅立たれてしまった。遺稿となった原稿をお届けし、冥福を祈りたい。

編集子 長谷川岱潤

連載

会いたい人 関 容子



撮影／タカオカ邦彦

坂東三津五郎という役者を、私は四代にわたって観てきている。

七代目は「踊りの神様」と言われた舞踊の名手で、その壮年期には六代目菊五郎と組んだ『棒しばり』や『身替座禅』が絶品だったそうだが、さすがにそれは観ていない。しかし晩年の『傀儡師』には間に合って、三津五郎の家によく授かったという男の一歳の曾孫を唐子（からこ）（人形の役）に、嬉しそうに抱っこして現われたときの情景は、はつきり脳裏に焼きついていて。あの赤ちゃんこそが、今の十代目三津五郎さんだ。

八代目三津五郎は七代目の養子。十数冊の著書のある学者肌のインテリで、芸風は飄々として洒落ていた。やはり晩年の七代目と踊った『寒山拾得』は、雪舟の水墨画から抜け出したという作品の趣向通り、古淡な味わい深い舞台だった。

九代目三津五郎は八代目の女婿。私が高校の歌舞伎研究会で舞台稽古の見学に行ったこ

ろはまだ坂東光伸時代で、渋谷東横ホールの若手花形公演『義経千本桜』『四の切』の狐忠信を、二代目松緑に懸命に教わっていた姿が今も眼にある。

そして十代目。仲よしの勘三郎との息の合った共演の場面があれこれ思い浮かぶが、やはり『棒しばり』や『団子売』などは、七代目三津五郎の曾孫と六代目菊五郎の孫（先代勘三郎夫人は六代目の長女）が今こうして踊っているのだ、と思つて観るせい、かと際名コンビの感が深い。二人一緒にの舞台は俄然面白くなるのが不思議なほどだ。

「彼は一つ年上ですけど、ぼく早生まれなので学年は同じです。先代中村屋のおじさんは、ぼくのことを彼の『悪友』と呼んでました。うちの父は菊五郎劇団だし、中村屋のおじさんとはそれほど一緒にの舞台はなかったのに、子供同士はよく遊んでましたね」

そう言えば勘三郎襲名（平成十七年）のときの歌舞伎座筋書に、二人の子役時代の楽屋

三津五郎

会いたい人
関 東 人

三津五郎



三津五郎夫婦と子三津五郎の幼少時代（左）
八代目三津五郎と八代目三津五郎の幼少時代（右）

九代目三津五郎夫妻と一緒の八十助（現十代目三津五郎）
6、7歳のころ高樹町の自宅前で撮ったもの

三津五郎さん ①

スナップが載っていて、勘九郎坊やを見るからに腕白そうだけれど、そのそばで胡座をかいている八十助坊や（三津五郎さん）は何となく扮別がありそうで、おかしかった。

「そうそう、このころから彼はジジくさかった、という勘九郎君のキャプションがついてたでしょ（笑）。子供のころ、彼がコーラ飲んで、ぼくがお茶なんか飲んでると、それを称してジジむさい、って言うんですよね。でも芝居に関しては、彼のほうがかなり大人びた考え方をしましたね」

それは昭和三十八年七月の歌舞伎座で、同年輩の子役ばかりで『白浪五人男』『勢揃い』を上演したときのことをさすらしい。配役は、日本駄右衛門が廣松（芝雀）、弁天小僧が八十助、赤星十三が梅枝（時蔵）、忠信利平が光輝（歌昇）、南郷力丸が勘九郎だった。

「普通だったから、勘九郎が弁天小僧をやりそうじゃないですか。でも彼は南郷がいい、って言うんです。理由は、鬘が丸羽二重で月代さかやき

が青い、大人っぽく見える頭だから、って。ぼくは単純に弁天小僧がやれる、って大喜びしていて、そんなマニアックな考えはまったくありませんでしたからね。彼のほうがまてたんです」

二人の交友はずつと続く。三津五郎さんは小学校から大学まで青山学院、勘三郎さんは暁星から大学は國學院と、通う学校は違っても、しじゅう顔を合わせていた。

「彼は青学にばかり、遊びに来てましたね。いいなあ、お前の学校。女の子が色とりどりで。こっちはグレーの女しかいねえんだよ、って（笑）。まああちらは神道系の学校ですしね。地味なのは仕方がないでしょう。二人とも大学は中退しましたけど」

十七、八歳のころ、二人だけで旅行をしたことがあったそうだ。

「ええ、ぼくが一人旅が好きで、お城を見て歩いてると言ったら、今度一緒に連れてってよ、と言われて。まず金沢へ行って丸岡城に



子供のころ、茶屋での三津五郎と勘三郎

案内して、それから京都へ行つて都をどりを観たりしました。金沢は安い旅館を探して、京都では懇意なお茶屋に泊めてもらう、と先に計画を話したら、先代中村屋のおじさんがそれ聞いて心配して、え？ 子供二人でお茶屋に泊んの？ って(笑)。父がそのお茶屋の名前を言ったら、なんだ、あそこか、つて安心なさったそうだけど。そこは祖父(八代目)にくつついてぼくが小学生のころから出入りしてた家だから、若い芸妓さんなんかが、あら、寿ちゃん、なんて本名で呼んでくれる。でも中村屋のおじさんは大病なさつてお酒やめてからは、そういうところにいらつしやらなくなつたんで、勘三郎君はなじみが

少ない。まあ、お父さんも昔はよくいらしたのよ、って声をかけてくれるのは、みんなおばあちゃんばかり(笑)。大いに差がつきましたよね。それで彼は発憤したらしくて、今、息子二人(勘太郎・七之助)によく言ってますよ。祇園でも先斗町でもお前らがチャホヤしてもらえるのは、俺が頑張ったせいなんだ、って(笑)」

三津五郎さんに会ったらお聞きしてみたかったことがある。それは以前、加藤武さんから伺った太地喜和子さんの葬儀のときに、文学座アトリエの狭い階段に三津五郎さんがじつと座りこんで長いこと瞑想に耽っていた、という話。そのことが強く印象に残っている。「あのときは本当にそうでしたね。初代水谷八重子さんとか、杉村春子さん、山田五十鈴さんといった主役で劇場をあけられる名女優のあとを引き継ぐのが喜和子さんだと思っていましたから、その花も実もある女優が突然

消えてしまったということは、全演劇界にとつてのものすごい損失だろうな、ということのを、あれこれ考えていたんです」

三津五郎さんと太地喜和子さんの共演の舞台は二回あった。最初は尾崎士郎の『人生劇場』を宮本研が劇化したもので、吉右衛門の飛車角、太地のおとよ、三津五郎さんが青成瓢吉だったので直接おとよから場面面はなかった。

次は秋元松代の『山ほととぎすほしいまま』。今度は何んと夫婦役だった。この芝居は「足袋つぐやノラともならず教師妻」などの句を残した杉田久女がモデルで、つまりその夫は平凡な学校教師。久女は中央俳壇の有名な俳人に激しい思いを寄せるが受け容れられず、深く傷ついて、だんだんと狂って行く……という、重いテーマ。

「この話が来たとき、ぼくは喜和子さんとはひと回り違うわけだし、夫婦役には抵抗があった。台本を読むとあまりにもつらそうな役

だし、ますますためらったけど押し切られて引き受けました。でもやっぱり出てみたら本当につらかった。ぼくのその学校の教師が勤めを終えて帰宅すると、奥さんは若い学生たちと俳句の話でワアーツと盛り上がってる。

それで自分で台所から御飯を持ってきて、一人で黙々と食べて……というようなのがそのままストレスになって、自分の家に帰ってもまったく油っこいものを受け付けなくなっちゃって、冷奴とか、ごまあえとか、そんなものしか口に入らなかった。そして千秋楽のカーテンコールになった途端に解放されて、憑き物が落ちたみたいになったんです。すると急におなががすいてきて、打上げの始まる時間前に何人か連れて焼肉屋へ行って、カルピを腹一杯食べた。それだけ役に侵されてたんですね。自分の見せ場とか、大声で怒鳴るとか、まったく発散の場のない役でしたから」

その共演の翌年、太地喜和子事故死（平成四年十月十三日）のニュースを、三津五郎さ

んは偶然、早朝の車のラジオで聞いた。

「忘れもしない、その日はゴルフの日で、朝四時に起きて車に乗って、ラジオのスイッチを入れたら太地さんが海で、つてあのニュース。えーつ、とひどいショックを受けました」

それで、三津五郎さんは、因縁話めいたことを真顔で語る。まるでひと昔前の役者みたいに。

「まずね、櫛笄をコレクションしてた人から喜和子さんの役に合う櫛を贈られたんです。髪は女の命だし、彼女はまずそれで何かに取り憑かれた。するとあるお坊さんが、こんなもの持ったら大変なことになる、つて預かってくれて、喜和子さんは少し元気になったけど、怖いことにしたらそのお坊さんが亡くなっちゃった。それで喜和子さんの最後の舞台は『唐人お吉物語』でしょう。お吉さんは唐人と言われるのが嫌いだったんだそうですね。唐人とは寝たけど、唐人じゃない、つてことなんです。ぼくは東京での舞台（三越

劇場を都合がつかずに観られなかったけど、観て来た友だちというのが喜和子さんの親友で先斗町の芸妓さん。その人はぼくの親友でもあって、本当に三人で楽しいつきあいをしていたんだけど、彼女によると、あんまり喜和子さんがお吉の役に入りこみすぎて、怖いくらいだった、っていうんです。で、東京を打上げて、旅公演で巡演して、いよいよ明日は最後の地、『唐人お吉』のタイトルの芝居でお吉ゆかりの下田へ乗りこもうという、前の晩に事故をやっちゃったわけでしょう。喜和子さんは洗面器で顔を洗うのもいや、っていうほど、水を怖がった人なのに、どうして夜の海が見たいなんて言い出したのか。しかも車を運転したスナックのママさんとは初対面。その日の昼間に町ですれ違っただけの縁で、喜和子さん、芝居のあとうちの店に寄ってね、と言われてその気になっただけなんです。その車は暗い海の突堤にバックで入って、そのまま海中に転落した。まるでお吉に呼ば

れたみたいだね。それでまたこれも不思議なことに、そのママさんの名前は斎藤さんで、お吉のお母さんの名前は斎藤キワ、っていうんですって」

「なんだか背筋が寒くなってきた。すると三津五郎さんが、気を変えて言う。

「喜和子さんって、あそこのこの演技がよかったって褒められるより、まるでその人がそこにいたみたいだった、って言われることを喜んだ。役にそういうアプローチのし方をしていたんです。何ごとにも全身全霊をかけて一直線に入りこんで行く。もっともっと共演したかったし、いろんな舞台を観せてもらいたかった。今でもつくづくそう思いますね」

(つづく)

この外に奥ふかき事を存ぜば、二尊のあわれみにはずれ、本願に
もれ候うべし。

法然上人「二枚起請文」

もし私が、このこと以外にお念仏の奥深い教えを知っていながら隠していると
いうのであれば、あらゆる衆生を救おうとするお釈迦さまや阿弥陀さまのお慈
悲に背くこととなり、私自身、阿弥陀さまの本願の救いから漏れ堕ちてしま
うこととなります。

教師の握り拳とモウらしい

信州は長野、善光寺のお膝元に暮らすようになって丸二十年が過ぎた。この間、東京生まれの私にとって聞き取れないほどのお国訛りを感じたことはなかったが、まったく知らない日本語があることには戸惑った。

その一つが「モウらしい」。たとえば子どもが転んで膝小僧を擦り剥いたのを見た時、「あーああ、痛かったなあ、モウらしい、モウらしい」などと使われる。

かわいそうにといった同情と、そこに少々「がんばってるのに、どうしてそんなことに。さぞや切ないだろう、やるせないだろう」といったニュアンスも含んでいるだろうか。「だろうか」と断定できずにいるのは、未だにその意味を掴み切れていないからである。長野に來た当初、「モウらしいが分からないのがモウらしい」などと言われて閉口して以来、大して進展がないままなのだ。

とはいえ、はたして人の感情や感覚を言葉で説明し切れるのか、いささか疑問に思っているもの事実である。もしかしたら誰もが暗黙のうちに「うまく言えないけど、とりあえず、こんな感じ」と、個人個人の微妙な心の動きを最大公約数の言葉に託しているのではなからうか。

だからこそ、感情や感覚を表す言葉はいろいろに解釈できるし、説明し切れ

なくもなる。長野に限って言えば「モウらしい」もその一つなのだろう。

感情や感覚は言葉に先立ち、一人一人の体験が感情や感覚に先立つ。言葉で説明するしないに関わらず、感情や感覚は確かに存在する。その点、言葉は後付のものでしかないと思うのである。

ところで釈尊の最後を伝える經典の一つに、中村元博士の訳著『ブツダ最後の旅』で知られる『マハーパリニツバーナ経』がある。自らの高齡を自覚され、死期を悟られた釈尊が弟子や信者たちに自身の教えを伝え残していく。それがこの經典の主題である。

その中で釈尊は、ご自身の教えについて「何ものかを弟子に隠すような教師の握り拳は存在しない」と仰せになっている。古代インドの宗教において、死の床に就いた師匠が気に入った弟子だけに秘密裏に奥義を授けることを「教師の握り拳」というが、釈尊にはそんなつもりは毛頭ないというのである。

必要なことはすべて語り尽くした。あとは一人一人が自分自身で体験し、実践して掴み取れ。いくら言葉で説明しても、実践がなければ絵に描いた餅である。釈尊にとって、覚りの境地とはそういう位置付けであると思うのだ。

釈尊にとって、言葉という土俵で目指すべき境地を伝えようとする教師の握

り拳は、単なる言葉のやりとりにはしか映らなかつたことだろう。

さて、冒頭のお言葉は法然上人の御遺訓「二枚起請文」の一節である。「このほかに奥深きことを存せば」云々には、語るべきことすべて語り尽くした、伝え残すべきことはすべて伝え残した、という上人の確信に満ちた思いが示されていよう。

阿弥陀仏の極楽浄土へ往生を遂げるためには、ただひたすらに「南無阿弥陀仏」お称えし、一点の疑いもなく「必ず極楽浄土に往生するのだ」と思い定めてお称えする。それが真正正銘、法然上人が伝えたかったことのすべて。法然上人にもまた、教師の握り拳など存在しなかつたのである。

物事を伝えたり、説明するためには言葉は必要である。しかし、こと覚りや極楽往生を求める段階に至っては、もはや言葉よりも体験や実践が必要なのである。この五月、浄土宗総大本山の先陣を切って、善光寺大本願において法然上人八百年記念の大遠忌法要が厳修される。

せっかくお念仏をお伝えいたしたいのだ。「お称えしないだなんてモウらしい」などと言われないうにしたいが、はたして「モウらしい」の使い方は、これでよかつたのだろうか。

（浄土宗総合研究所 袖山榮輝）

第十六回

江戸を歩く

増上寺から江戸城へ

森清鑑

大江戸ウォーカー

赤坂へ

川越藩城主（埼玉）、十七万石、松平大和守の上屋敷（九千七百坪）は、潮見坂、靈南坂、江戸見坂に囲まれている。潮見坂から左上に大きく回り込んだ、急勾配の坂道が江戸見坂（坂上に大倉集古館）で、この坂からは、江戸の町並が眼下に一望できた。川越藩主は、度々代わっている。寛永十六年には、松平伊豆守信綱が、島原・天草一揆を鎮圧した功で入府する。彼は、川越藩政の確立に大きく寄与するとともに、三代家光、四代家綱を支え、「知恵伊豆」と称された。時代劇にも度々登場する。明和四年（一七六七）から幕末までの藩主が、越前松平家で、代々、大和守を名乗った。

大倉喜八郎

明治になって、この敷地は、大倉財閥の創始者、大倉喜八郎のものとなる。大倉喜八郎

は、渋沢栄一と並び称される、真の大実業家である。彼が設立、または設立に関与した企業は、大成建設、帝国ホテル、大倉商事、千代田火災海上（あいおい損害保険）、川奈ホテル、帝国製麻（帝国繊維）、サッポロビール、日本無線、東京電燈（東京電力）、日本製靴（リーガルコーポレーション）、日清製油、東海紙業（東海パルプ）と枚挙にいとまない。設立した建築物は、鹿鳴館、帝国ホテル、帝国劇場、大倉山ジャンプ競技場、祇園閣（京都）。晩年には、公共事業や教育事業に惜しみなく私財を投じた。大倉集古館を、大正六年に敷地内に設立。これは、日本最初の私立美術館である。ここでは、彼が永年に亘って収集した古美術を展示している。さらに、彼は、潮見坂側の敷地内に、大倉商業学校（旧大倉高商、現東京経済大）を創設した。



◆慶延2年の赤坂地図

喜八郎は、八十歳半ばにして、有名な狂句

を詠んでいる。「四十、五十は、はな垂れ小僧、男盛りは、八十、九十」。ある日、四十代の山下亀三郎が八十代の喜八郎に暇乞いに来た。事業がにっちもさっちもいかなくなり、死を決意し、世話になった喜八郎に挨拶に来たのである。この時、喜八郎はそのことをいち早く察すると、「お前とそっくり入れ替わりたいよ」と言った。「何故です？」と山下。「若さだよ。俺ならなんとでもする」。この言葉に奮起した山下は、借金のを片づけ、後に山下汽船（商船三井）の創業をはじめとする、大実業家になる。

喜八郎は人を見る目があり、これと見込んだ人物をとことん信用した。帝国ホテルを設計した、フランク・ライトもその一人である。法外な時間と費用がかかり、周囲の者からは、反対の意見が押し寄せた。しかし、彼は頑として受け付けず、一言も口を挟まず、家具、調度に至まで、あの天才の夢を実現させたの

である。

八十九歳になって自分の土地を見たいからとおちゃらけて、南アルプス赤岳に登った。登山と言っても、籠に乗り、従者九十人を連れての山登りではあったが、その意気や凄まじい。その二年後に彼は人生の幕を閉じた。「遊ぶも働くも月日は流れる、奮闘に意味を持つ」。渋沢栄一とは最も気の合う間柄であった。多くの共同事業を起こしている。東京商業会議所の開設も彼とのコラボレーションの一つである。豪快な人物である。

嘉永四年、この越後の名主の倅は、江戸に出る。そこで水を買っている商売人に出くわす。一緒に来た友人は、「江戸とはなんとせちがらい処よ」とつぶやく。しかし、彼は、「江戸では水ですら商売になるのか」という。そして、すぐに饅頭店に奉公。安政四年、乾物店を創業。慶応三年、大倉銃砲店を創業。翌年の戊辰戦争で軍需品の供給、富を築く。明治四年、初の洋服仕立て店を開業。明治五

年、欧米視察旅行。ここで、岩倉使節団と交流する。明治十年、西南戦争勃発。明治二十七年、日清戦争。武器商人として財をなす。その財力を近代日本の実業、起業に注ぎ、しかも晩年は、公益事業に投入した。私財を子孫に残さず。明治三十一年の大倉商業学校設立の際には、当時の金で、私財五十万円を投じたといわれる。息子の大倉喜七郎は、敷地内に現ホテルオークラを造った。

黒田屋敷

大和守屋敷の西側道は、霊南坂である。芝高輪、東禅寺開祖、嶺南和尚が慶長十五年に当地に庵を結んだ。それが寛永年間に高輪に移る。和尚の名が霊南坂の由来。段々状の潮見坂を登れば、この霊南坂とぶつかる。そこは、若干の広小路になっており、左側に常陸牛久藩（茨城）山口筑前守、上屋敷（米国大使館）、右に溜池・外堀に出る、広い葵坂通。そして佐賀藩松平肥前守（鍋島）三十五万石

の中屋敷（財務省印刷局、虎ノ門病院）。葵坂通を右手に見て直進し、榎坂を下る。この坂の右側一帯は、溜池の広い河川敷に面している。道沿いに水番屋、馬場（自転車会館）、大の稽古場があった。左側は、牛久藩に続いて糸魚川藩上屋敷の塀。榎坂を下ると、突き当たりは、福岡藩松平美濃守（黒田）五十二万石中屋敷（敷地約二万坪、赤坂ツインタワー）。通称、黒田藩邸溜池屋敷である。この屋敷塀を正面に見て、道は左右に分かれる（首都高速三号）。右は、溜池、赤坂田町方面。左（南）を取る。少し、歩き、屋敷塀に沿って、右（西）に曲がる。すると南部坂である。急な坂の両側には、屋敷を囲む細い川が流れている。昔は、余程急な坂道だったと見えて、「難部坂」ともいった。

南部坂

仮名手本忠臣蔵、「南部坂雪の別れ」で有

名な坂だ。大石内蔵助は、討ち入りの前、浅野内匠頭夫人、瑠泉院に暇乞いをし、血判状をさりげなく渡した。討ち入りを報告するはずであつたが、密偵の気配を察し、不本意な別れを告げる。内蔵助の面前で如実に不満を示した瑠泉院は、事後、この次第を知り、慟哭する。一方、内蔵助は、雪降りしきる中、屋敷を振り返つては、別れを惜しむ。その背中には、寂しさが漂う。忠臣蔵の名場面である。南部坂は、江戸初期に南部藩（盛岡）中屋敷があつたところから地名となつた。元禄の前、この南部藩中屋敷が備後（広島）三次藩浅野家と交換され、当地に來たのである。三次藩は、瑠泉院の実家。内匠頭亡き後、彼女はここに身を寄せていたということになっている。

南部坂の右手は、松平美濃守（黒田）の屋敷塀が続く。坂を登り切つて、そのまま下つて、右に曲がると、黒田屋敷の西側に隣接し、寄合、柴田七九郎（二千三百坪）の屋敷があ

る。ここが海舟晩年の邸宅となつた（明治元年から亡くなるまでの屋敷。明治期には、十五代慶喜から養子にもらつた勝精宅。その後、平成初期まで氷川小学校。海舟が愛した、イチヨウの古木がでんと聳えている）。この辺りの台地は、南部坂上を頂点として西側方面に下っている。地名も、今井台から今井谷に。南部坂に戻る。登り切つて、信濃松代藩屋敷（アメリカ大使館宿舎）塀に沿つて、左に曲がる。すると、右側一帯が氷川明神社。ここが元禄時代、瑠泉院の実家、備後国（広島）藩浅野家の中屋敷であつた。この三次藩の跡地に八代吉宗は、享保十四年（一七二九）、自分の産土神として、氷川明神社を造営した。近くの今井谷にあつた社を遷宮したのである。以来、赤坂氷川神社として今日まで地元鎮守神となつている。イチヨウや櫻の巨木がこの辺りでは、信じられぬ神秘の世界を現

◆南部坂



◆境内の大銀杏



出している。

神社に面した、南側の坂道を今井谷のほうに下りて行くと、元氷川^{もとひがし}。急峻な下り坂である。右手は、氷川神社の西裏に接して盛徳寺。降りきったところに旗本、稲垣姓の屋敷がある。ここが安政六年から明治元年まで海舟が居を構えたところである。龍馬が北辰一刀流の千葉重太郎とともに、暗殺に出向き、逆に海舟を師と仰ぐことになる。咸臨丸で太平洋を渡る時にもここから出発した。無論、龍馬は度々、この勝邸を訪れている。幕末の騒乱期には、屋敷の警護も買って出ている。「慶応四年四月四日、土方歳三来る。流山顛末を言う」。海舟の日記には、流山で捉えられた近藤勇の助命嘆願にこの屋敷を訪れた土方の姿が記録されている。また、同年五月、今度は、海舟の留守中に、官軍兵士が乱入。妹で佐久間象山未亡人の順が一步も引かずに応対し、この危急を救った。どうにも凄惨である。

海舟は、前述の黒田藩邸に住む、永井青崖

のもとで、蘭学を学ぶ。それが縁で二十三歳の時、赤坂田町に最初の所帯を持つ。それから元氷川の当屋敷に引っ越してくる。そして、この屋敷で、江戸城無血開城、明治維新への道、いわば日本の方向性を決定づける、大仕事を成し遂げたのである。彼は赤坂をこよなく愛した。無論、屋敷は、氷川神社の直ぐ裏手にあり、海舟は、足繁く参詣した。境内の四合稲荷^{しあな}の扁額は彼の書である。

雷電為衛門

この辺り一帯は、旗本屋敷が多いが、江戸初期には、広島、浅野家の本家・分家の領地であった。元氷川坂を下り、海舟旧宅を右に見て、今井谷を左に下り、さらに右に曲がる。すると、新町五丁目の通り（現赤坂通り）に出る。渡ると、ここからは、坂道。その正面に報土寺。この寺に沿って右に曲がりくねって登る急坂が三分坂^{さんぶんさか}。江戸期は、現在よりも勾配がきつく、坂の下で銀三分（百円余）を



◆海舟、安政6年から明治元年までの住居。元氷川。

払い、荷物を持って貰い、登った。三分坂の由来である。

報土寺には、雷電為右衛門の墓がある。雷電は、文字通り、大相撲史上、最強の力士である。信濃の生まれだが、出雲、松平不昧公に召し抱えられ、雲州伝統の雷電の四股名を承る。四十四歳で引退するまで、黒星はわずかに十。勝率九割六分二厘。これはもう驚異的な数字である（ちなみに千代の富士の勝率が七割六分一厘）。四十四歳まで相撲を取ったというのも凄いことである。彼はまた義理に厚く、人格的にも優れ、相撲取りとしては希有な教養があった。書き残した、寛政十年から文化十年（一八一三）までの日記、「諸国相撲控帳」は今日、江戸期の相撲を知る重要な資料となっている。

報土寺の門、右手に三分坂に向かって築地堀（練堀）がある。江戸初期のもので貴重な歴史物である。坂はこの寺を起点に急勾配となり、左に巻くようにうねり登っている。坂

の左側は、報土寺を起点に六ヶ寺がひしめく、赤坂寺町。右側は広島藩松平安芸守（浅野）四十二万石の広大な中屋敷（敷地一万九千坪）が溜池に向かって、その近くまで伸びている（明治期は近衛連隊、現TBS放送、赤坂サカス）。

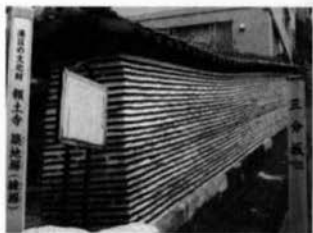
屋敷の東南は、ぐると旗本屋敷が連なる。安政三年の地図では、溜池沿いの赤坂田町四丁目の処に勝麟太郎の名も見える。海舟が赤坂に最初に所帯を持った処である。鬼平犯科帳の長谷川平蔵も十九歳までこの辺りで育った。旗本屋敷は、氷川神社の裏一帯、松平大膳太夫（毛利）、萩藩下屋敷まで続く。浅野本家の屋敷下の旗本屋敷群は、元禄時代まで、浅野分家の屋敷があったところで、浅野内匠頭の屋敷もここにあった。海舟晩年の屋敷跡記念碑を左に見て、TBSの方に行くと、氷川公園があるが、浅野屋敷の一部である。

檜屋敷

◆雷電為右衛門墓



◆報土寺築地堀、三分坂



三分坂下の溜池から来る道を南西に行くと（現赤坂通り）、左右が旗本屋敷で、すぐに広大な萩藩毛利下屋敷（約三万三千坪。六本木、防衛庁跡地、東京ミッドタウン）にぶつかる。この屋敷に沿って左に曲がり、やや急な坂に登る。檜坂である。毛利屋敷は見事な檜が林立していたので、檜屋敷といわれた。道は江戸時代と全く同じ位置にある。この坂を登らずに直進すると、左側、毛利屋敷に隣接して松江藩松平出羽守十八万石の中屋敷。松平不昧公の中屋敷である。雷電は不昧公のお抱え力士であつたので、近い、報土寺との関係も分かる。彼は、報土寺に梵鐘を寄進している。松江藩屋敷から道は、坂になる（乃木坂）。すると、道のすぐ右手が寄合旗本屋敷と鉄砲稽古場。ここが今の乃木神社である。坂を登ると六本木道。左に曲がる（六本木交差点方面）。少し歩くと、道の左側は毛利屋敷の堀、右手は与力、同心、御先手組の屋敷群。さらに行くと、右手、深広寺、光専寺、正信寺、

教善寺と浄土宗の寺が続く（光専寺と正信寺の間を首都高3号線六本木通りが突っ切っている）。江戸初期、この辺り（交差点の周辺）は、一面の野原で、麻布の原といわれていた。増上寺からは近い。ここで二代將軍秀忠の正室、崇源院（お江戸の方、淀君の妹）の火葬が行われた。これら四カ寺が三回忌の法事を勤めたことで、茶毘にふされたところから風下一帯の土地を拝領したという。

深広寺には、江戸の高名な儒学者、佐藤一斎いっさいの墓がある。神田昌平坂学問所塾長。門下生は、六千人といわれ、育った弟子の中には、佐久間象山、渡辺華山、横井小楠などがおり、勝海舟も大きな影響を受けた。彼の語録「言志四録」は、西郷隆盛、吉田松陰、現代では、吉田茂等にも影響を与え、今もなお、読み継がれている。「少にして学べば、壮にして為すなり。壮にして学べば、老いて衰えず。老いて学べば、死して朽ちず」。

（つづく）

【参考文献】

江戸名所図会 角川書店刊
広重の大江戸名所百景散歩 人文社刊

法然上人
とその
時代

シリーズ第四章

壇ノ浦へ

第七回

作

石丸晶子

画

アーサ



十九

維盛たち三人が屋島を後にしてひと月近く経った寿永三年（一一八四）四月初旬の夕暮れである。

一艘の小舟が屋島の浜に着くと、舟を漕いでいた一人の男が降り立ち、小松家の飯屋形に向かった。

武里たけさとであった。

彼は維盛これもりの弟資盛すけもりに直面すると

「小松の三位中将維盛様さんみちうじょう、^す過ぐる三月二十八日、紀州熊野の海にご入水しづい。御乳人子おんめのこの重景様しげかげ、童わらわの石童丸いしどうまるも御供仕おんともつて入水なされました」

と膝をつき、涙を押し拭いながら、

「わたくしは都に居りました時、牛飼いとしてお屋敷にお仕えいたしました武里と申す者でございます。舟を操る心得がございましたので、三位中将様が屋島を脱出されます御助けをいたせとのご命令をうけ、只今帰島いた

しました」といった。

「ご入水なされてか」

資盛は絶句した。長兄維盛が姿をくらましてからこの方、資盛ら小松家の公達きんだちは、

「池の大納言と同じく、小松家の維盛も二心を抱き、頼朝に走ったのではないか」

と一門の人々から疑いの目で見られ、資盛自身も

「或いは兄は」

という気持ちの中で、肩身の狭い、辛い思いをしてきたのであった。

「三月二十八日夕刻。念仏数百返お称えになりつつ海に御身を投じられました。重景様、石童丸に続いてわたくしも海に入ろうといたしましたところ、滝口入道様たきぐちにちどうに

『殿のご最期を京の奥方様と屋島にお伝えねばならぬ』

ときつく押し止められ、心ならずも、こうして帰島した次第にございます」

その時のことどもがあざやかに甦り、袖を顔に当てて武里は号泣した。

「詳しく申してみよ」。一門を裏切つて頼朝に走つたのではなかった、とホツとする一方、兄は平家一門を見捨てたのだ、という衝撃が走つた。蒼白になつて資盛は武里に命じた。

三月十五日、武里が漕ぐ舟でまだ夜が明けぬ屋島の浜を離れた維盛主従三人は、瀬戸の海を東に向かい、鳴門の瀬戸を過ぎ、紀州黒井（現在の海南市黒江）の湊に着いた。

しかし紀州まで来てみると、高野山へ、というはじめの決心は揺らぎ、維盛の心は都に残してきた妻子への慕情でいっぱいになつてゐた。紀州から京はすぐそこではないか。

よほど京に帰つて今一度の再会を、と揺らいだが、源氏に生け捕られた重衡は京中を引き回され、つい先ごろ鎌倉に護送されている。それを思うと、決心も付きかねた。

しかしなおも京に行くべきか否か維盛は悩

む中、結局、京へは赴かず、初めの決心通り高野山へ登つていった。

鬱蒼とした森林の中に修行者の庵室が点在していた。

いくつかの庵室を尋ね廻り、やっと、かつての従者滝口入道時頼の庵を尋ねあてると、「今は屋島においてになるとお聞きしておりましたのに、これは夢ともうつとも思えませぬ」

と時頼は涙を流した。俗世にあつたころ、彼は滝口武士の正装に身を整え、立烏帽子に髪をなでつけた、ダンディーな武者であつた。しかし世を捨てた今、未だ三十にはならぬ筈なのに、濃い墨染めの衣に同じ袈裟、香のけぶりはあたりに漂い、きびしい仏道修行に徹しきつた姿は、やせ衰えた老僧と見まがうばかりであつた。

二十

「平家一門、波路を西へ落ちていきましたが、

明け暮れわれらには、京に留めおきました妻や子らのことだけが思われ、戦のことには心向かいませんでした。かかる心が傍目にも見えたのでありましょう、大臣殿（宗盛）も二位殿（時子）も、『池の大納言のように、この人も二心があるのではないか』とわれらに打ち解けてはくださらぬ。されば、さほどの心残りなく屋島を退き、高野までやってきました」

そういうと、維盛ははらはらと泣いた。「この上は髻を切り、熊野へ参る宿願を果したい」涙のうちに彼は続けた。

当時、熊野は後白河はじめ平家一門に厚く信仰された本地垂迹の社である。維盛も祖父清盛や父重盛の供をして何度か参詣したことがある思い出深いところであった。

（時頼の許で出家し、あの熊野へ行こう）屋島を離れる時から彼はそう思っていた。

維盛のこの気持ち聞いた時頼は、「この世は夢まぼろしにございます。どのよ

うにしても過ごせましょう。ただ、死してのち、長き世の闇に落ちるのこそ、悲しくも辛いことでございます」

彼はそういうと、高野山堂塔巡礼に案内したいとすぐに腰を上げ、弘法大師廟のある奥の院へ、主従を案内していった。

しかし、かなしいかな、いかに高野山の堂塔を経めぐり、弘法大師の廟に詣でも、本当のところは出家の決心も何の決心も、維盛にはつかなかった。髻を切り、高野山を経巡り詣でたのちはそこを下り、熊野詣でに向かつてその後……と決心しようとしてみても、それを真実実行しようとする、またしてもためらいが生じてくる。

（どうしたらよいか）高野山滝口入道の庵室に身を置いて数日、自身の心身をもてあました維盛は、

「われらは今や生きる道狭く、逃れられぬ身となっている。今より後、熊野に赴いて参拝し、そこでいかようにも成り果てる心積りだ。



それゆえそなたたちは都へ帰り、いかならん人にも宮仕えして身を立て、妻子を養って暮らすがよい」

とみずからの決心を促す気持ちで重景と石童丸に言ってみた。

しかし維盛のことばを聞いた重景は、

「殿」

と涙を拭うと、

「情けのうございます。殿を見捨ててわれら
が他家に奉公する身とお思いでございましたか。重景の家を何とお考えでございます。父
景康は平治の合戦のとき、小松殿（重盛）の
御供にございましたが……」

平治の合戦で、重景の父景康は小松殿重盛の身代わりになって討ち死。その時二歳であった子の重景は七歳で母にも死別し、以来小松家に養われることになったのであった。

そして維盛とともに元服した彼は、松王重景の名を与えられ、以来今日まですでに十九年に及んでいた。

小松家とともに生きてきたそんな歴史を掻き口説いた重景は、

「この世はまことに無常にございます。楽しみ、栄え、いかに時めいておりましようとも、千年の齢を保てるわけではございませぬ。さすれば西王母も東方朔も名のみ残して姿は消えました。これぞ善智識にございます。地の果て、海の底であろうとも、最後まで殿にお供いたします」

というや太刀を抜き、その手で髻を切つて滝口入道に髪を剃らせ、出家の身になった。傍らの石童丸十八歳もこれに続いた。

維盛のことばを聞いた二人が、続いて髻を切り、主に先立って出家したのを見ながら、彼自身はいえ、もう一度都の妻子の姿を見ることができれば思い残すことなく出家できるのだが、と未練に思つて泣くばかり。相変わらずの優柔不断で、維盛の心中を平家物語はこう記している。

「これらが先立つ有様を見給いて、中將（維

盛) いよいよ心ほそうおぼしめして、御涙いとどせきあえ給わず」と。

しかし滝口入道に諭され促されて、出家者が称える「清信士度人経」の偈を三度唱えた維盛は、ようよう遂に髪を切った。法名浄円。重景と同じ二十七歳であった。

二十一

出家した維盛は、滝口入道を召し連れ、修行者に身をやつして高野山を下りると、ようよう熊野参詣に旅立った。

粉河寺、そして熊野参詣道の途中々に置かれた熊野勧進の王子、王子、を伏し拝みつ、夜、一行五人は熊野本宮に至りついた。莊重森閑としたあたりのたたずまいである。霧は仏の大慈大悲を現して熊野山一帯を覆って立ち籠め、音無川の川音も莊嚴にひびく中、月は皓々と夜空に輝いていた。

ここにいたるまで、なおなお妻子への煩悩の想い断ち切れず、涙すること多かつた維盛

であったが、神域に入って身も心も洗われる思いである。

「本地は弥陀如来におわしませば、撰取不捨の本願あやまたず、西方浄土へ迎え給え」屋島を出てきた維盛にとって、この地上に帰るべき場所はどうにもなかった。

高野山を巡拝し、熊野を巡拝する中で、それは維盛にも次第にはつきり分かつてきたことであった。

熊野三山参詣をし終えた後は、死ぬほか道のない身なのである。

「撰取不捨の本願あやまたず、西方浄土へ迎え給え。西方浄土へ」

八方諸仏の中、弥陀仏こそは撰取不捨でおわします。

それは父重盛在世中、小松の屋敷に招かれた法然から、維盛が直接に受けた教えであった。

そのときの法然の姿と教えが、今、維盛の心にはつきり甦って来ていた。

彼は一心に祈った。

「本地は弥陀如来におわしませば……。お、お、法然上人、法然上人、お助けください、お助けください……」

弥陀のからだに、法然上人に、しがみつく心で維盛は一心に祈った。

掻き口説き祈った。

一行も夜もすがら、維盛に合わせて祈りに祈った。

やがて濃い霧を払うように、白々と夜が明けていく。

本宮を後に、新宮、そして那智の大社を参拝して熊野三山参詣を終えた維盛、重景、石童丸、武里、そして滝口入道の一行五人は、浜の宮王子から船に乗り、沖に漕ぎ出していた。

穏やかな春の夕暮れである。

漫々たる海上遙かに小さな小島が夕靄に霞んで見え、海鳥が飛び交っていた。

生まれては つひに死ぬてふ ことのみぞ
さだめなき世の さだめあるかな

維盛はそう口ずさむと、はらはらと泣きながら滝口入道に、

「この期に及んでも妻子への煩惱の絆断てませぬ。死にとうはございませぬ」

と訴えた。

まさに今、死を前にしつつ、それでもなお、生への執着断ち切れぬかつての主・維盛を、時頼は静かに引き寄せ、抱きしめた。

「生者必滅、会者定離は憂き世のならいにございます」

船べりに膝をついてすすり泣く従者三人の上に、入道時頼の声が聞こえてきた。一語一語、時頼自身がみずからに確かめているような、しかし、静かな声であった。

「さすれば金剛不壊の浄土往生こそが肝要にございます。憂き世にお心を置いてはなりません」

古き伝統技

三代にわたる信頼

浄土宗法衣専門

有限
会社

古島法衣店

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)38421289
振替001802145231

せぬ。弥陀如来は「十悪五逆をも導かん」と悲願されました。われらの真の故里は浄土にございます。これらはみな、法然上人のみ教えにございます。殿は西方浄土への往生を、直接法然上人からお受けになりました。法然上人のみ教えを受け、弥陀仏の悲願の力に頼られましたが、殿の往生に一点の疑いもありませぬ。二十五菩薩も浄土の門を開いて、殿を待つておられます」

抱き寄せられた時頼の胸の中で、維盛は震える声で念仏を称え始めた。「なむあみだぶつ。なむあみだぶつ。……」

熊野の春の海にその声だけが伝わって

く。入道時頼も、従者たちも、今はみな、夕日が傾き始めた西を向いて、維盛とともに念仏を称え始めた。

しかし維盛の念仏は何時までも終らなかった。終ろうとしなかった。

と終わりを知らぬその念仏の声の中で、「殿、お先に参ります」

重景が叫んだ。重景はそう叫ぶや、海に身を投じていった。

すぐ続いて石童丸が続く。

激しくからだを震わせながら、それでもなお念仏数百遍。終に維盛も春の海に身を投じていった……。



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●水

〔特選〕

妙薬のごとく若水を一気飲み

佐藤 雅子

この頃はほとんどが水道だろうが、元朝に初めて汲む水に違いはない。神仏にお供えしたあと一気に飲むと、これからの一年の健康が約束されたような気持ちがある。まずは何よりの妙薬というわけである。

〔佳作〕

水鳥や僧坊にはや人の声

河合富美枝

動きいる川底の稚魚水ぬるむ

村上 青女

水仙の畑猪がみみず振る

浦田 ちゑ

●棒

〔特選〕

棒構え猪穴のぞくおよび腰

石原 新

猪の穴を見つけた。この辺りに居る時季ではないのだが、それでもひよつとということはある。棒ぐいを構えて近づくと、こわご

わのぞいてみる。「および腰」がその時の作者の様子を伝えておもしろい。

〈佳作〉

野遊びの行方占う竹の棒

金谷 友江

辛棒の寒念仏や弥陀の前

中島富士子

棒杵を打って藁塚積み上げぬ

浜口 佳春

●自由題

〈特選〉

底冷えやつい手で探る抜糸跡

西井

正

寒い日である。家にこもっていても、じわじわと冷えが身にしみてくる。気がつくとな手が抜糸した所を探っている。手術は無事に終わり、心配も何もいらなくなっているのだが、手で探るのが癖になっているのだ。

〈佳作〉

凍て鶴に有り明けの月蒼茫と

河合富美枝

酷寒の雨マラソンのランナーに

松尾三重子

侘助や干菓子に薄き色ばかり

近藤アツ子

読者の声

毎号楽しみに読んでおります。仏教誌であるのにあまりお説教臭くなく、読み応えのある連載や、興味深い記事がたくさん載っているところが貴誌のいいところのように思えます。そこで注文なのですが、時事的な問題を取り上げてはいかがでしょうか。いま世界的に仏教者が注目されています。ミャンマーの仏教者が苦悩しています。チベットの仏教者も殺されたり、逮捕されたりしていると聞きます。長野善光寺は聖火リレーに関して意見を鮮明にしたためにかどうか、悪質な悪戯に悩んでいます。

浄土誌上旬会のお知らせ

締切・二〇〇八年五月二十日
発表・『浄土』二〇〇八年九月号
選者・増田河郎子（『南風』主宰）
応募方法

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

●葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

さい。

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-14 明照会館内

月刊『浄土』誌上旬会係

根津自由題

兼題
(季語ではありません)

きではないかと愚考する次第です。

(北海道 寺院住職)

大学の勉強とは別に廃仏毀釈について研究をしています。実家近くのとある山の中のスベテの羅漢さんの顔が打ち壊されているのを見て、あまりにすさまじい蛮行に胸が潰れるような思いをしたことがはじまりです。過日、バーミヤンの仏教遺跡をタリバンが破壊したときに受けた衝撃と似ています。百年ちよつと前に日本でも同じようなことが起きたことが悲しくて仕方ありません。原理主義というもの怖さは恐ろしいほどのです。しかし私たちはイスラムを怒ったり笑ったりすることはできないのです。日本でも国家神道原理主義のようなものが働いたのだと思います。廃仏毀釈についてお教授いただけるような論考を期待しております。

(京都 学生)

■編集部

この頁では『浄土』誌に対するご感想、ご意見、ご希望を募っております。体裁は問いません。お葉書でも封書でも、どうぞ編集部までどしどしお寄せください。

さっちゃんはネッ

50 かい目

かまち♡よろう



水流れ清々として花うたう

岱潤

若葉の緑が目飛び込んでくる、そんな嬉しい季節を迎えている。自然界のこの爽快さは、毎年必ずやってきてくれるけれども、政治の世界、実生活の世界の暗雲は、益々濃くなって行くように感じられる。

小泉元首相以来の改革とはいったい誰のための改革だったのか、高齢者や障害者といった社会的弱者が益々住みにくい世の中になっている。無着成恭師は現代の日本社会を評して、「三年前おきたJR西日本の脱線転覆事故で、同時に日本も転覆したんだ」と言い、ひろさちや師

は「競争原理が唯一のルールである今の日本は地獄である」と言いきっている。

『ジョー カタストロフィ』という言葉の意味を出した。「地球の破局」という意味である。人類が現状のままの生産活動を続けられ、間違いなく人類は滅亡に向かうという科学者たちの予測だ。そしてその前段階として言われていることは、先ず勝ち組だけが生き残る世界、恥ずべき生存になるとしている。今の日本は、もうそうなりかけているのだろうか。

そんな時代だからむしろ仏典のヒマラヤに住みながら果作りをしない「寒苦鳥」のように、あくせくせずに生きたい。横莫山師が言っている。

雑誌『浄土』

特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
 巖谷勝正(目黒・祐天寺)
 大江田博導(仙台・西方寺)
 北山大超(焼津・光心寺)
 加藤亮哉(五反田・専修寺)
 熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
 桑原恒久(川越・蓮馨寺)
 佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
 佐藤成順(品川・願行寺)
 佐藤良純(小石川・光圓寺)
 東海林良雲(塩釜・雲上寺)
 須藤隆仙(函館・称名寺)
 高口恭行(大阪・一心寺)
 田中光成(町田・養運寺)
 中島真成(青山・梅窓院)
 中村康雅(清水・実相寺)
 中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
 野上智徳(静岡・宝台院)
 藤田得三(鴻巣・勝願寺)
 堀田卓爾(静岡・華陽院)
 本多義敬(両国・回向院)
 真野龍海(芝・天光院)
 拙博之(網代・教安寺)
 水科善隆(長野・寛慶寺)
 宮林昭彦(大本山光明寺)
 山田和雄(諏訪・貞松院)
 (敬称略・五十音順)

「香りはほのかなのがヨイ
 色はきれいなのがヨイ
 一つより二つの方がヨイ」

(長)

編集チーフ
 編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤光道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

浄土

七十四巻五月号 頒価六百元
 年費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十年 四月二十日
 発行 平成二十年 五月一日

発行人

佐藤良純

編集人

大室了皓

印刷所 株式会社

シーティーイー

〒一〇五〇〇一

東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話 〇三(三三)五七八 六九四七

FAX 〇三(三三)五七八 七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

ホームページ <http://gekkann-jodo.info>

かいとうおうじょう

皆當往生

皆、まさに往生す
無量寿經亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

生野善應

往生とは、ほとけとの繋がりをえた
人間的甦りである。

仏壇で合掌、墓前に献花して故人を偲ぶとき、清々しき、温かき、充実感といった宗教感情を体験します。これは、私たちの心とほとけの心との接触を示すことに他なりません。

法然上人は、死による別離をあくまでも回避して、ほとけと人との関係を再構築する救いの世界を提示しました。これが浄土です。その世界を信

じて、コミュニケーションが成り立つとき、そこに心の安らぎが求められるから救われると説いて、その世界に往き生まれることを「往生」と称したのです。

上人の浄土思想の特徴は、楽天的な救いの教えを立ち上げて、人びとの死の不安を拭い取つてきたことです。

法然上人鑽仰会の

本

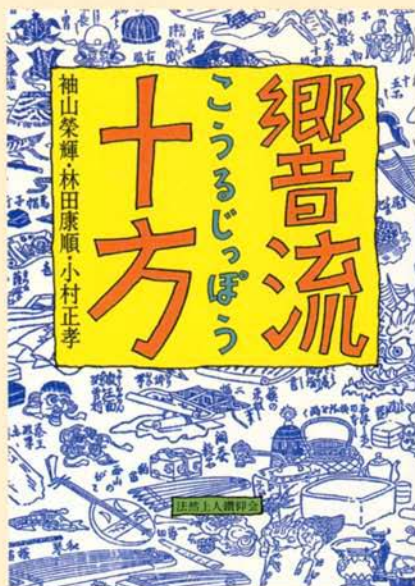
当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036



響流十方ころるじっぽう
600円(税別)

『差出人は法然さん』
600円



月刊『浄土』
バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円

※額装寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円 (別途梱抱料300円)



「法然上人絵伝絵葉書」
(8枚セット)800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より